当年生コンテナ苗の可能性について

白石蔵王森林組合
太田　清蔵

1　取り上げた背景

戦後に造成された人工林資源は、かつてないほど充実し、本格的な利用期を迎えている。一方、日本の林業の生産性は、大きく向上しておらず、森林所有者の利益が十分に確保されない中で、伐採した後に植林がされないという事態が発生している。

このため、再造林のコスト削減や需要に合わせた生産が行いやすいなどのメリットが期待できるスギやカラマツの「当年生コンテナ苗（150ml）」を育苗するとともに、一般的な方法で育苗した苗と一緒に山に植栽し、成長を比較することで、当年生コンテナ苗の可能性について検証することとした。

2　取り組みの経過

①　当年生苗育苗について（宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉の苗畑）

平成 30 年 2 月 21 日に直播きし、当年度山出しするまで苗畑で育苗したスギコンテナ苗（育種少花粉、育種混合）の成長（苗高）を調査した。

②　当年生苗植栽について（宮城県刈田郡蔵王町遠刈温泉 標高約 330～350m）

平成 24 年 12 月 11 日に山林へ植栽したスギの当年生コンテナ苗（8 ヶ月苗）と 2 年生コンテナ苗について、6 成長期の成長（苗高及び根元径）を調査した。

3　取り組みの成果

①　当年生苗育苗について（宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉の苗畑）

直播き後、6 回に渡り苗高を調査したところ、いずれの調査時においても育種混合のコンテナ苗の成長が、育種少花粉より勝る結果となった。また、育苗に使用したコンテナの種類では、スリット入りのものが、育種混合、育種少花粉とも成長が悪かった。

②　当年生苗植栽について（宮城県刈田郡蔵王町遠刈温泉 標高約 330～350m）

当年生コンテナ苗では、一般的に根元径に対して苗高が高くなりやすい（形状比が高い）ため、植栽時に根元径の太さを問題視されることがある。

しかし、6 成長期の調査結果から、植栽時の根元径の太さは、その後の成長に大きな影響は与えていないと判断される。また、2 年生コンテナ苗との比較においても、植栽時は平均苗高が低かったものの、その後の旺盛な成長により、当年生コンテナ苗の平均苗高が勝る結果となっている。

4　今後の展望

培地、肥料を含む育苗方法の工夫等により、得苗率を高めつつ、山に植栽できる規格を調査データ等に基づき、見直しすることで、当年生コンテナ苗の活用の可能性が広がり、さらに再造林のコスト削減にも繋がるものと考えている。